貴生町遺跡

調査の経過　貴生町遺跡は、名古屋市西区貴生町に所在する。地理的には濃尾平野南東端の沖積地上で、五条川・庄内川などに挟まれた地帯にいくつも存在する微高地上の一つに立地している。周辺には、西方約１kmに朝日遺跡、東方約１kmには月縄手遺跡などがある。発掘調査は、名古屋環状２号線建設にともない、昭和53年、名古屋市教育委員会によって開始されて以来、これまでに名古屋市教育委員会と本センターによって数次にわたって行われてきた。今年度は、国道302号拡幅にともなう1088㎡（Ａ・Ｂ区）、国道302号側道部の小田井・山田共同溝建設による540㎡（Ｃ区）の発掘調査を実施した。　（鷲見　豊）

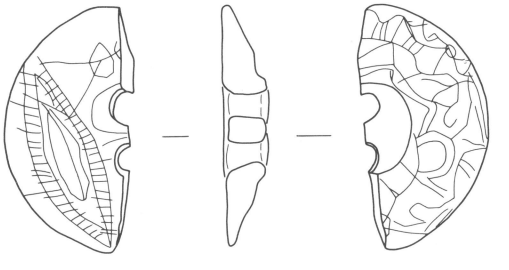
遺構と遺物　92Ａ・Ｂ・Ｃ区で検出された遺構は古墳時代前期と戦国時代以降の二時期にわかれる。この遺跡の基本層序は上から、１ｍをこえる客土層、近・現代の水田耕土・床土層、戦国期以降の遺物包含層であるやや青みをおびた茶褐色砂質土層、古墳前期の遺物包含層である暗茶褐色粘質土が堆積し、明黄褐色砂質シルトの地山面にいたる。遺構検出はこの地山面で二時期同時におこなった。古墳時代に属する遺構としては、Ｃ区西端をほぼ南北に流れるＳＤ01、やはりＢ区西端に位置する南北溝ＳＤ02、Ｂ区西半部のＳＫ01などがあり、そのほかにも調査区全域で足跡と思われる小ピットを多数検出した。

戦国期以降の遺構としては、Ｂ・Ｃ区東端部を南北に貫いて流れる幅約7.5ｍ、深さ約2.5ｍの自然流路ＮＲ01、Ｃ区東半部を東西方向に流れてＮＲ01に注ぎ込むＳＤ03、Ａ区の東西溝ＳＤ04のほか、古墳前期同様に足跡状の小ピットが多数みつかっている。

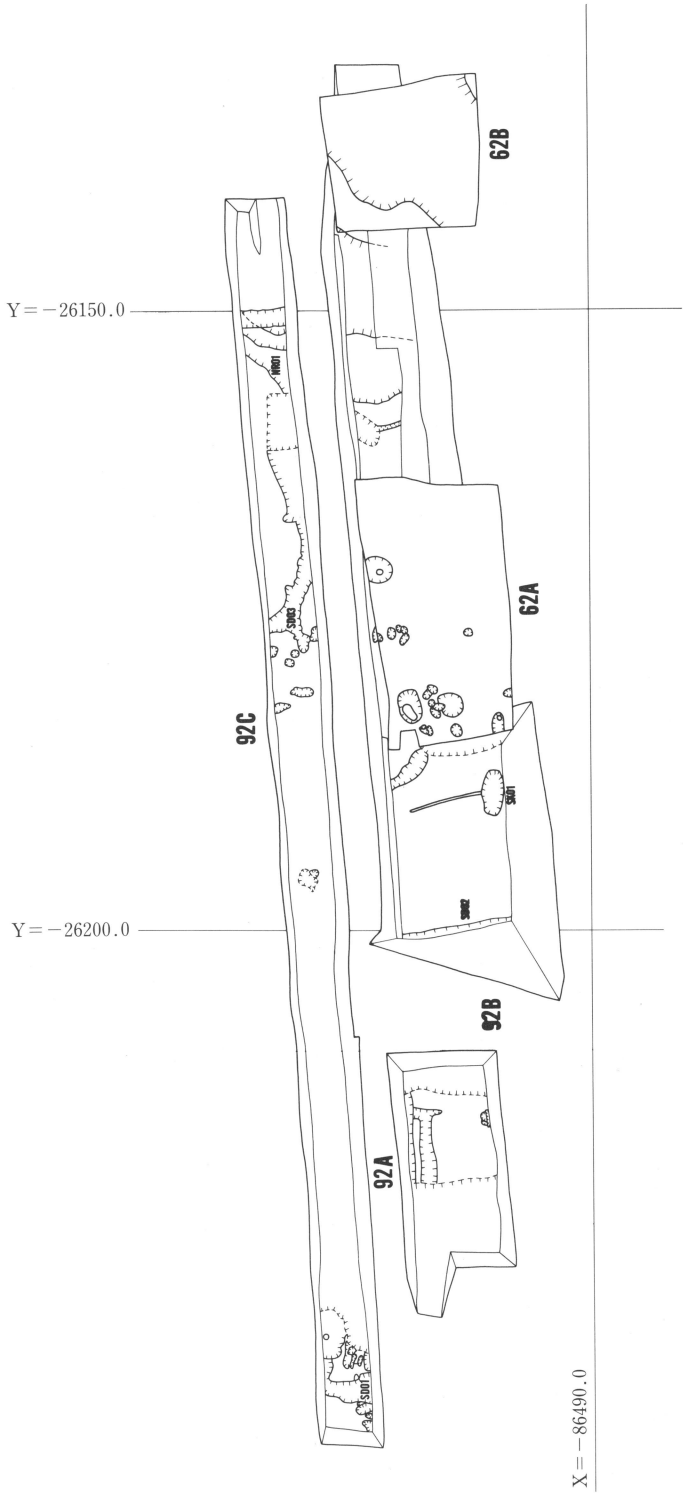
古墳前期の遺物はＳ字甕など若干の破片が上記の遺構のほか、戦国期以降の遺構からも出土している。なかでも注目されるのは表裏両面に線刻で模様をほどこした滑石製の有孔円板である。断面は紡錘車状の薄い截頭円錐形を呈し、中央部二ヶ所に穴をあけている。ＮＲ01からの出土であるが、材質・模様などから古墳前期に属するものと考えている。

このほか、ＮＲ01の西肩付近からは人骨の破片が数点出土している。　（樋上　昇）

ＮＲ01土層断面（92Ｃ区）



線刻有孔円板実測図（１：１）



貴生町遺跡遺構図（1：300）